

## スギザイノタマバエに関する研究 (IV)

## — 成虫の発生回数 —

宮崎県林業試験場 讃 井 孝 義

## はじめに

スギザイノタマバエの発生回数については、これまで2回、または3回といわれている。<sup>1-9)</sup> 筆者は現在えびの市において成虫の羽化消長について調査をすすめているが、1975年と1976年の結果からえびの地方においては2回発生であるという知見を得たのでここに報告する。なお調査にあたってえびの営林署および林試九州支場昆虫研究室各位にお世話になった。ここでお礼を申し上げさせていただきます。

## 調査方法

## 1) 調査地

えびの市大字末永61林班ツ小斑。この林分は現在36年生で標高1000m、枝打、間伐も時期を過ぎている。

(50年に弱度の間伐を実行) 林内は常にうす暗く、年間を通じて湿度が高い。樹幹にはビッシリとコケが生えているものが多い。林分の中央をえびの高原へ通じる道路が通っている。

## 2) 調査時期

1975年6月9日に羽化箱を設置し、6月16日に第1回の調査を行った。成虫の羽化は10月に入って終了したので10月末まで行った。1976年は樹皮中の幼虫が蛹になりはじめた4月19日に設置し10月いっぱい終了する予定である。

## 3) 羽化箱

成虫の羽化を樹皮の一定面積あたりで調査するため写真のような内側の寸法4cm×50cmの木箱を1本の調査木あたり4個とりつけた。(写真-1)したがって1本あたりの調査面積は800cm<sup>2</sup>で調査木は12本であるから合計9600cm<sup>2</sup>あたりの羽化数を調査したことになる。被害の激しい木では樹幹の凹凸がひどいので木箱に市販のポリウレタンテープをとりつけて設置した。箱の背側には寒冷砂を用いていたが、天敵が逃げるため若干小目網を用いた。とりつけにはタイヤチューブを幹にくくりつけ、その間に羽化箱をはさむと調査が容易に行える。この箱に入ってくる成虫を毎週1回、(月曜日)調査した。



写真-1 羽化箱

## 結果と考察

えびの市における調査結果を図-1, 2にしめした。(図-1, 2)50年度調査開始の6月16日はすでに第1回目の発生の終り頃で7月初めには発生はみられなくなつた。2回目の始りは7月中旬で約1ヶ月後に2回目のピークとなった。その後はまた減少し9月には2~3頭ずつとなった。51年度は5月17日にスーピングでとらえたのが最初であったが、まだ羽化箱には入っていなかった。羽化箱内での最初の発生は5月24日であろうと思われるが都合で調査が出来ず翌週の31日にはすでにピークに達していた。1回目の終了は6月末であった。2回目は7月中旬に始まり8月10日頃ピークを迎えた。50年の9月は殆んど発生をみなかったが、51年には若干の発生がみられ10月になって少なくなった。このようにえびの市では明らかに2回の発生のピークがみとめられた。

これまでに定期的に羽化数を調査した報告には山木<sup>6-9)</sup>と汰木<sup>1-5)</sup>らのものがある。前者は樹幹周囲に枠をとりつけ寒冷砂をまきつけ、後者はハエトリリボン10本をとりつけて調査を行っている。山木は北諸県郡三股町、汰木は西臼杵郡稚葉村での調査である。それによれば稚葉ではえびのに比べて3~4週間サイクルがみられているが確実に2回発生である。成虫調査は3年半であるが、他に幼虫数調査が7ヶ年分ありその蛹の数か

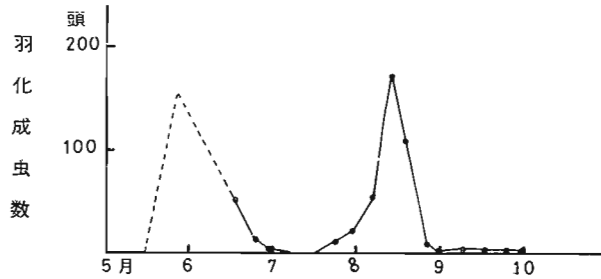


図-1 1975年スギザイノタマバエ成虫の羽化経過

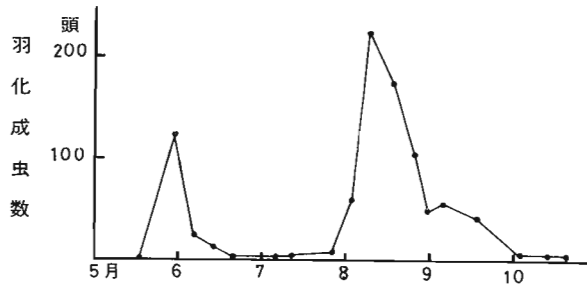


図-2 1976年スギザイノタマバエ成虫の羽化経過

ら成虫の発生回数を推定するといずれも2回の発生のピークがあることを示している。

一方山木のデータは昭和45年の発生は3回である。この年、少し離れた林分でも調査を行っているが、そのデータと46年の分は2回か3回か判然としない。45年の稚葉は2回発生であったのに三股では3回であった理由は判らない。この他にも2回発生であろうという観察の報告がある。これらを総合して基本的な発生のパターンは2回で、その年の気象条件の違いや場所によっては2回目の発生のあとにもう1回発生することもあるのであろう。しかしこの定期的な調査はこれまでに3個所で行われたのみであるから、もっと調査個所をふやして観察をする必要があると考えている。

参考文献

- (1) 汰木達郎ら：九大演習林研究経過報告, 110~113, 1967
- (2) : 57-62, 1968
- (3) : 69-70, 1969
- (4) : 65-67, 1970
- (5) : 148-149, 1971
- (6) 山本寿昭：宮崎林試業務報告, 227-260, 1970
- (7) : 129-140, 1971
- (8) : 80-83, 1972
- (9) : 日林九支講研論, 25, 181-182, 1971